

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第 123 回 (2019. 7. 1) の要旨

拝読文(『真宗聖典』67～69 頁)

魂神精識、自然にこれに趣く。当に独り値い向かい、相従いて共に生まれて、更りて相報復すべし。絶え已ることあることなし。殃悪未だ尽きざれば相離るることを得ず。その中に展転して出ざる期あることなし。解脱を得難し。痛み言うべからず。天地の間に自然にこれあり。即時に卒暴に善悪の道に至るべからずといえども、会ず当にこれに帰すべし。これを一つの大悪、一痛、一焼とす。勤苦かくのごとし。たとえば大火の、人の身を焚焼するがごとし。人、能く中にして心を一つにして意を制し身を端しくし行を正しくして、独りもろもろの善を作りて衆悪を為らざれば、身独り度脱して、その福德、度世・上天・泥洹の道を獲ん。これを一つの大善とするなり。」

仏の言わく、「その二つの悪というは、世間の人民、父子・兄弟・室家・夫婦、すべて義理なくして法度に順ぜず。奢婬嬌縦しておのおの意を快くせんと欲えり。心に任せて自ら恣にかわるがわる相欺惑す。心口おのおの異に、言念実なし。佞諂不忠にして巧言諛媚なり。賢を嫉み善を誇りて怨枉に陥し入る。主上、明らかならずして臣下を任用す。臣下、自在にして機偽端多し。度を踏みて能く行いてその形勢を知る。位にありて正しからざれば、それがために欺かる。妄りに忠良を損じて天の心に当たらず。臣はその君を欺き、子はその父を欺く。兄弟・夫婦・中外知識、かわるがわる相欺誑す。おのおの貪欲・瞋恚・愚痴を懐きて自ら己を厚くせんと欲えり。多くあることを欲貪す。尊卑上下、心俱に同じく然なり。家を破り身を亡じて前後を顧みず。親属・内外これに坐して滅ぶ。

「魂神精識、自然にこれに趣く」で説かれる魂・神・精・識とは、命を感じている我々の意識の在り方を、様々な言葉で言い換えたものです。魂神精識という言葉を通して人間の心意識、つまり現象による心の在り方というものが、悪道を犯し、その罪の結果が痛みとなり、痛みがやけどとなる。そういう形が前で説かれ、「五悪・五痛・五焼」という言葉で表現され、因果関係として成立する。つまり、我々が現象的に感じられるような過去・現在・未来という在り方を、「魂神精識」と表すのです。何か自分以外の責任がこういう辛さを押しつけてくるように思うけれども、自分自身が生きて来た結果が今となって、それがまた未来を生み出す。「魂神精識」にはそのような意味があるのでしょう。

「当に独り値い向かい、相従いて共に生まれて、更りて相報復すべし」。人間として間柄を生きているにも関わらず、それぞれ与えられた個々の身体があり、そこに生命がある。人間であると同時に、「独り」という本質を持っています。そして「相従いて共に生まれて」と説き、人として生れて他人を感じますから、他人に従って共に生きる。しかし、そこにお互い上手くいかない面がある。終わらずして、繰り返される。

「殃悪未だ尽きざれば相離るることを得ず」とは、殃は罪という意味。悪は我々の心の煩悩です。「殃悪」とは、罪や悪が尽きることがないから、相離れることが出来ない。「その中に展転して出ざる期あることなし」と。命そのものが、絶えず変化し続けていく。どのように変化し続けても、そこから脱出するような時はない。命の在り方が、繰り返して我々に感じられる。それ

故に「解脱を得難し」と説くのです。解脱とは、広い意味としては煩惱からの解脱と教えられます。ところが、大乘仏教に至ると単に煩惱からではない。人間が束縛している在り方から本当に解き放たれる在り方を回復する。そういう意味で「真解脱」とも説かれます。根本の闇、すなわち「根本無明」は、人間の上において完全に対治し淘汰できない。親鸞聖人は真の大乘仏教を求めて、究極の覚りを求めて悪戦苦闘された。『涅槃経』所説の「真解脱」というものを求めたが、自分には不可能であった。それだからこそ、大悲の教えに触れたのです。聖人においては、『大無量寿経』が語ろうとする大悲の教えの中に、『涅槃経』の真解脱の意味を確認されたのでしよう。

仏教では、悪を対治し解脱を求めていくように教えられますが、そもそも善悪の道、善いとか悪いとか言うことが判断されるような在り方など、私たちはすぐに気付くと言うことが出来ないのです。この善悪の道が人間の感ずる判断基準を基礎にできている。ところが、これを聖人のお言葉では、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。」（『真宗聖典』640頁）と明かすように、人に対しても自分に対しても、善悪という判断を下し、何とかしていこうということが起こるが、そういう心そのものが、ともすると心の闇を作り出してしまいます。

「悪」という点において「これを一つの大悪、一痛、一焼とす」の一節が明かされますが、一つの悪を生み出し、そこから生ずる痛み、それが火のように焼けていくような痛みとされます。すなわち「悪・痛・焼」という言葉を通して、我々衆生は勤苦し、深い苦悩の在り方というものが教えられてくる訳です。

現実生活で苦悩する衆生に対して、『大無量寿経』は「人、能く中にして心を一つにして意を制し身を端しくし行を正しくして」と説かれます。一般的に「一心」とは、人間が一つのことに集中して成り立つ一心です。ただ、ここでいう一心とはそうではない。親鸞聖人は、天親菩薩の『浄土論』で説かれる「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」（『真宗聖典』135頁）の一心を、『大無量寿経』で呼びかける信心と読まれました。如来の大悲が我々に呼びかけて、我々自身の中に如来を信ぜずにおられないという心。如来の大悲を信じ、如来の本願力を信じようと言う心です。如来のはたらきが我々の心を翻して如来を信じさせる、如来の大悲を信ぜずにおられない心にさせる。言い換えれば、そのような心が起こった時、もはや我々が意識を集中するような努力ではなくなる。それこそが「真実信心」という訳です。その真実信心が一心なのです。

臨済宗の一休禅師がお書きになったことで有名ですが、たとえば「諸悪莫作 諸善奉行 自浄其意 是諸仏教」という七仏通誡偈があります。悪をなさず、諸の善を作れ、そして自分自身の心を浄めていきなさい、心を清浄にすることこそ、仏教である。伝統的な仏教ではそう教えます。

人間として生まれ、衆生と共に生きている。と同時に、我々は一人ひとりの身を与えられ、身において独りの命となっている。一人ひとりがこの人生を生きて終わって行くわけですから、代わることは出来ない。どれだけ愛する人であっても、代替はできない。親が子どもに代わることは出来ない。子が親に代わることも出来ない。我々の人生でどれだけ悲劇が起こったとしても自分で引き受けなければならない。そのことが「身独り」と説かれる厳粛な事実です。

その「独り」という問題ですね。宗教的な自覚というものは、『歎異抄』にありますように「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば…」、これは十方衆生を平等に救いたいと呼びかけているのですが、これは誰のためなのかと言ったら、「親鸞一人がためなりけり」というように了解さ

れた。つまり、自分一人が本当に大悲を信ずるか否かは、大悲の救いが成り立つかどうかの勝負です。自分はさておいて誰でも助かるような道、そのようなことを言っても宗教の事実にならない。大悲から生み出される教えに、独りとして呼応するのです。政治とか社会学とかいうのは一般的問題ですが、仏道を歩むことは本当に自分において自覚化していくのです。自分が救われずして、世界が救われるなどあり得ない。そういうことが仏の教えを「聞く」という姿勢の核心です。必ずしも出家したら、たすかるわけではない。ただ独りという。一人ひとりが独りを大切にするということは、独り以外にたすかる道はないからです。独りがたすかることが、同時に他がたすかる道であって欲しいと願われている。それは如来の願いですから、大悲に触れて私がたすかったからには、一切衆生にも触れて欲しいという大悲の中にあることは、当然です。本当に解放されるということは、自分を前提とした愛着から解放されるわけです。無明から解放されるということは、苦悩の命を見極めるということなのです。そういうことが起こりますから、やはり「独り」という自覚と、独りのところに「一切衆生」ということが言えてくるのだと思うのです。

「独り」という事実立つとはいえ、「命」の身ですから、命である以上、死なないということはありません。命は必ず生れて死ぬ。そういう命の只中に死なない「いのち」に触れる。こんな不思議なことはないわけです。でも、そのような意味が如来の名前として「無量寿」と説かれる。『無量寿経』という経典の名前にもありますように、何か命が命を超えたような「いのち」（寿命無量）という意味を呼びかけているのではないかと思うのです。

確かに一人ひとり、命が命としてあるという点ではそうですが、ありのままにあるという在り方を、我々の「慢」という煩惱が起こって、そうあることを許さない。常に周囲と比較することで自分を立たせようとする。他と比較して、自分が驕り高ぶる、優等感からくる高慢。反対に、自分を低くみる劣等感からくる卑下慢などです。いずれも「慢」です。こういうのが、『成唯識論』では「根本煩惱」、すなわち六大煩惱の一つの「慢」に相当するのです。一方、「憍」の方はそうでない。「憍」は随煩惱と言われる。これは根本煩惱ではない。「憍」とはそうした高ぶるという字、すなわち自分で高上することを表わす字だとするのです。そこに独りの衆生としての「憍慢」という言葉が表れます。

人間とは、やっかいな存在です。「佞諂不忠」と説かれます。つまり、忠というのは忠義という言葉があって、中の心というのですが、つまり中心がある心ということでしょう。ここに中心があって、そこに意識が集中していく。そのような在り方において忠という字はある意味で誠実性がある。たとえば上の者が間違いを犯した場合にはそのことを、言葉を用い態度を持って示す。こういうことが、やはり忠という意味を持つわけです。

そうではなくてへつらっていると、それは不忠になってしまうわけです。これも人間関係の中でやっかいです。社会では間違いは間違いだと言うことが、忠なのでしょうが、現実的には言えない。お互いに足を引っ張り合う。それが人間の「佞諂不忠」として明かされます。

経典には「主上、明らかならずして臣下を任用す」（主上不明、任用臣下）と説かれます。主上というのは、上に立つ者。特に国王とか、会社であれば社長である。そういう在り方を「主上」と言うのです。その上の者が不明である。智慧がないと言いますか、明らかではない。そして臣下を任用する。故に自分が本当に賢い智慧を持っていて臣下を任用するのではなく、何か邪心とか、欲があって生きているような人間が上に立った場合は、へつらう臣下を任用してしまう。

こういうわけで、「臣下、自在にして、機偽端多し」と説かれるのです。つまり、下で使われる身として生きるものが、上の人間を逆手にとって自在にする。そして機偽端多しというように、偽りだらけとなる。このように、世の中の在り方を仏説では徹底的に批判していくわけです。

三毒五悪段は、これでもかと言うほど人間存在の罪の深さを語る。我々自身が自身の中にある罪の深みに陥っていく。そういう人間がこの世に誕生して、生きている。これはある意味で仕方がないと言えば、そうなのですが、仕方がないでは済まない。そのような根源的な悪の心と言いますか。罪悪の心をえぐり出していくわけですね。

「主上の臣下」という言葉に触れましたが、これから尋ねていこうとする「忿を成し怨を結ぶ」（『真宗聖典』69頁）という言葉も、親鸞聖人は『教行信証』の流罪記録のところを持ってこられます。つまり、この三毒五悪段が、今、法然上人の教団を弾圧し、そして自分の身の上において起こった苦悩があるけれど、この具体相は、現に『大無量寿経』の教えとしてここに示されているのだと。そういう現実に直面している教えであるのです。

親鸞聖人が35歳の時に、法然上人は75歳でした。法然上人の念仏教団が弾圧された。その時にいわゆる顕密仏教と言われますが、皆、国家がらみの伝統教団でありました。その当時の権力機構として、ある意味で国全体を支えている思想として仏教が意味を担っていた面が強かったと思うのです。

ところが、法然上人がそういう仏教に見切りをつけて本願の念仏、つまり本来一切衆生が平等に救われる道を開いた。こういうことで、比叡の山を下りられて、商人であろうと女性であろうと、盗人だろうと全ての人たちを受け入れ、念仏ひとつでたすかるのだという仏教を開かれました。すなわち、ある意味で為政者や貴族だけのための教えではない、庶民の仏教と言いますか、権力から落ちこぼれた人たちの救いを確立された。

そういう面から、宗教的真理として人間が本当にたすかるとはこういうことなのだといった面を持ち続けていた仏教に潜む矛盾・虚偽性、そして、それまで国家仏教として真実の如く、生きて来た聖道門の仏教の立場というものが、ある意味では立つ瀬がないと言うか、国家仏教に変質を迫り、根底が揺り動かされた。そういう危機感をもったのではないかと思うのです。すなわち『無量寿経』が語ろうとしているような人間の虚偽性、知らずして権力に媚びる。あるいは知らず知らずのうちに上の者に忠義のような顔をするとか、そういう権力などに基づく人間関係の中で何が真実なのか見えなくなっている。人間が生きているということは罪悪でしかない、法然上人が、実直に突きつけたことが弾圧される原因になったのではないかと思うのです。

法然上人のお仕事は、親鸞聖人からすると「選択本願」を宣布することだった。つまり大悲から一切衆生を平等にすくい上げたいという選択本願を日本に広める。そういうお仕事を法然上人が始められ、親鸞聖人はそれを『大無量寿経』に基づいて、受け継がれたのです。

文責：藤村潔（親鸞仏教センター研究員）